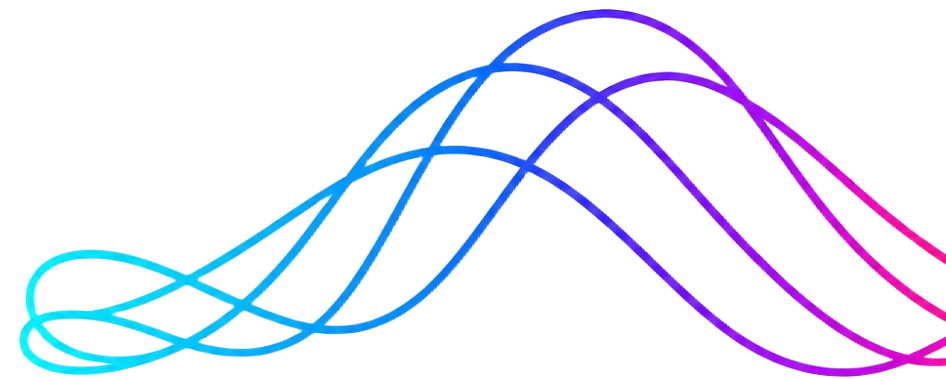


SHANNON LLC | RAPID PoC

高速PoC・プロトタイプ検証

サービス資料

作り込む前に、動くもので確かめる。アイデアを最短で動くプロトタイプにして、実データ・実利用で仮説を検証します。



S H A N N O

「作るべきか」の判断を、会議資料ではなく動くもので下せるようにします

「作るべきか判断できない」「要件が固まらない」段階から、動くもので確かめます。



投資判断ができない

アイデアはあるが、投資に見合うか判断できず先に進めない。机上の企画書だけでは、社内を説得する材料がそろわない。



要件が固まらない

要件が固まらず、本開発をなかなか始められない。関係者で議論を重ねても結論が出ず、時間だけが過ぎていく。



作ったが使われない

作ってはみたが、想定したほど使われなかった。投資した後に気づくため、手戻りのコストが大きくなっていく。



生成AIの試し方が不明

生成AIを業務に取り入れたいが、何から試せばよいか分からない。話題は多いのに、自社の業務での使いどころが見えていない。



動くデモが早く欲しい

社内提案や資金調達に向けて、動くデモが早く欲しい。資料だけの説明では、実現イメージが相手に伝わらない。



本当に作るべきかの見極め

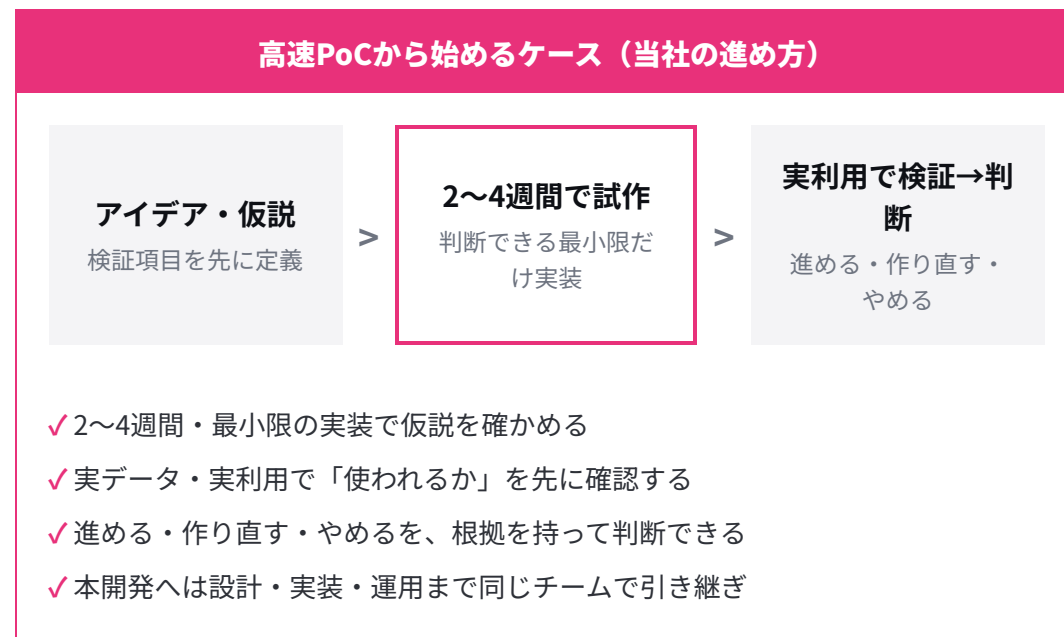
作り込む前に「本当に作るべきか」を見極め、投資判断に必要な材料をそろえたい。検証を後回しにするほど、失敗のコストは膨らんでいく。

※ PoC=Proof of Concept（概念実証）。仮説が成り立つかを、最小限の実装で確かめる取り組みです。

多くは**2～4週間の短期**で、動くプロトタイプと検証結果までお出しします。検証したい仮説が一つでも構いません。

検証を投資判断の「前」に置くことで、失敗のコストを最小化します

一般的な進め方と高速PoCの比較。違いは「使われるかどうか」に気づくタイミングです。

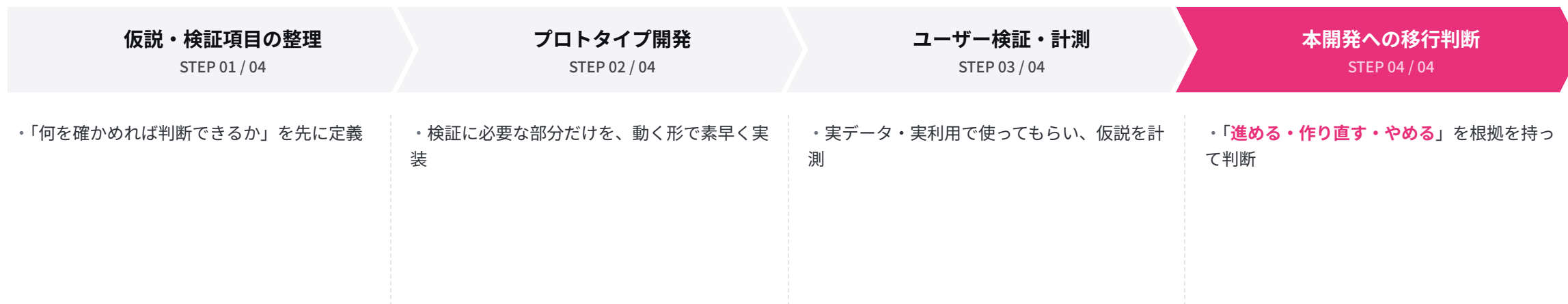


検証を「前」に置くのが高速PoC

失敗を早く・安く経験できる構造にすることで、本開発の投資判断に根拠を持たせます。次ページで対応範囲の全体像をご説明します。

仮説の整理から移行判断まで、通常2～4週間で一巡します

仮説の整理から、プロトタイプ開発、ユーザー検証、本開発への移行判断まで。**判断できる最小限**に絞って進めます。



仮説の整理 → 試作 → 実利用で検証 → 判断（通常2～4週間）

2～4週間

標準の検証期間

動くプロトタイプと検証結果までお出します

1っ～

仮説一つからご相談可

検証したい仮説が一つでも構いません

3択

検証後の判断

「進める・作り直す・やめる」を根拠を持って選ぶ

生成AIの活用も前提に、素早く試作します。要約・分類・対話・自動化などの実現性を小さく試し、使いどころまで見極めます。

「何を確かめれば判断できるか」から先に定めます

対応範囲（1/2）：検証すべき仮説の言語化から、判断できる最小限のプロトタイプ実装まで。



仮説・検証項目の整理

HYPOTHESIS

「何を確かめれば判断できるか」を先に定義します。検証すべき仮説と成功の目安を短時間で言語化し、関係者と合意してから進めます。

- ・ 検証すべき仮説の言語化
- ・ 成功の目安の設定
- ・ 短時間で言語化・合意
- ・ 投資判断に必要な材料の洗い出し

向いているケース：要件が固まらず、本開発を始められないとき



プロトタイプ開発（数週間）

PROTOTYPE

検証に必要な部分だけを、動く形で素早く実装します。作り込みは避けて判断できる最小限に絞ることで、数週間で試せる状態にします。

- ・ 作り込みを避けた最小限の実装
- ・ 判断できる最小限にスコープを絞る
- ・ 数週間で動く形に
- ・ 実データ・実利用で触れる状態で納品

向いているケース：社内提案・資金調達に向けて動くデモが早く欲しいとき



AIを使った試作

AI

生成AI・LLMを前提に、要約・分類・対話・自動化などの実現性を素早く試します。業務のどこで効くか、使いどころの見極めまで行います。

- ・ 要約・分類・対話・自動化の実現性検証
- ・ 業務での使いどころの見極め
- ・ 「生成AIを試したいだけ」の相談も可
- ・ 小さく試して実現性を見極め

向いているケース：生成AIを何から試せばよいか分からないとき

※ LLM＝大規模言語モデル。スコープ確定時に、検証範囲・期間・成功の目安を書面で合意してから着手します。

検証結果を「進める・作り直す・やめる」の判断に直結させます

対応範囲（2/2）：実データ・実利用での検証と、本開発への移行判断まで。



ユーザー検証・計測

VALIDATION

- ・ 実データ・実利用での検証
- ・ 仮説の成否の計測
- ・ 次の判断に使える結果への整理



本開発への移行判断

NEXT

- ・ 「進める・作り直す・やめる」を根拠を持って判断
- ・ 根拠に基づく投資判断の支援
- ・ 作り直す前提の部分も事前に整理してお伝え

① 動くプロトタイプ

実データ・実利用で触れる状態で納品します。画面や資料ではなく、実際に動くもので判断できます。

② 検証結果レポート

仮説の成否と計測結果を判断材料に整理します。「進める・作り直す・やめる」の判断に直結する形です。

③ 本開発への引き継ぎ整理

作り直す前提の部分を事前に仕分けして整理します。本開発に進む場合の設計・実装へ無駄なく繋がります。

※ 上記①～③がPoC終了時のアウトプットです。

PoCで作ったものは、そのまま本開発へ。設計・実装・運用まで同じチームで引き継ぎます。

ヒアリングから検証報告まで、4ステップで進めます

通常2～4週間で、動くプロトタイプと検証結果までお出しします。

01



ヒアリング

アイデア・検証したい仮説・制約をオンラインで伺います。検証したい仮説が一つだけでも構いません。

02



スコープ確定

検証範囲・期間・成功の目安を書面で合意します。書面での合意後に着手します。

03



プロトタイプ開発

判断できる最小限を、数週間で動く形に。作り込みは避け、検証に必要な部分だけを実装します。

04



検証・報告

実利用で計測し、仮説の成否を次の判断に使える結果として整理・ご報告します。

ご相談 → スコープ合意 → 試作 → 検証結果のご報告（通常2～4週間）

本開発に進む場合は、そのまま設計・実装・運用まで同じチームで引き継げます。まずは高速PoCで確かめてから、パーティカルSaaS開発やAIモダナイズーションへ接続する進め方もできます。

※ 料金は要件確定後に書面でご提示します。最初の30～60分のオンライン相談は無料です。

会社概要

社名 シャノン合同会社 (SHANNON LIMITED LIABILITY COMPANY)

代表者 三浦 昌大 (Masahiro Miura)

設立 2026年4月 (決算月：3月)

拠点 東京都豊島区池袋2丁目17-8 / 千葉県柏市若柴178-4 / 北海道札幌市中央区北二条東3丁目2番2号マルタビル8階

資本金／取引銀行 9,900,000円 / 三菱UFJ銀行柏支店

事業内容 プロダクト開発・運営 / インフラ構築・運用 / エンジニアリングエージェンシー

パートナー Xserverビジネスパートナー / Microsoft Cloud Partner Program

連絡先 050-1794-9651 / contact@shannon.co.jp / <https://shannon.co.jp>

3 拠点
東京・千葉・札幌

28 件
公開実績
2014年～現在

10 業種超
対応業種
金融・医療・小売・SaaS・警備など



E.O.F

